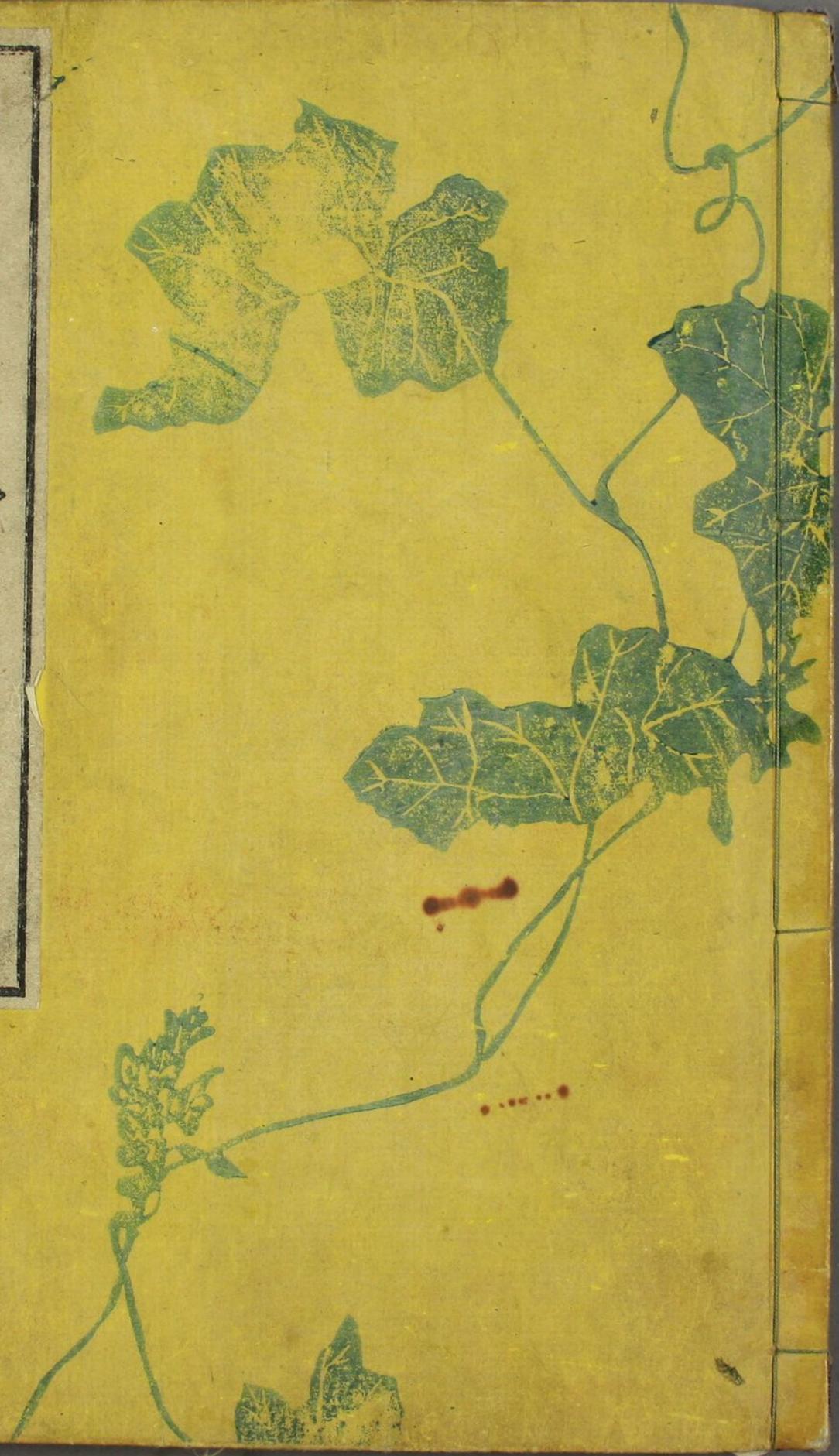




紫式部日記註釋

一



松の屋藤井大人
清水宣昭大人 著述

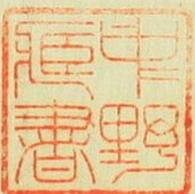
紫式部日記註釋

東京

光文書房



紫式部日記釋入



あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり
あまのうららとらるる書こいあまのうららにけり

一と利は信はくちりしむるもあはれなるは
とく人あはれなるもあはれなるは
うと久きをゆのれもあはれなるは
よとくしりもあはれなるは
このあはれなるは回しつるもあはれなるは
かとは見し多たあはれなるは
あはれなるはあはれなるは

か
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは
あはれなるはあはれなるは

一、り付くをるるをたてしを先んず
 うさき如くさもさおあさ言る
 あらう如く説をたてしをさるるを
 一、事あるを紫式部日記釋よりよ書あり
 したるはかたしをたてしを人
 ねれり事子の何よりあそ中記れあり
 とめくをさるるをよめあはれたるを

さいすた多流つてまたはるるに
 うにたかたもはたはるるを
 よいさるるをさるるを考め
 あもあつた釋より人たあつたをさるる
 かたはるるをまたさるるをたてしを
 ねるるをさるるをさるるを
 あつたをさるるをたてしをさるる

とららうららあまうららあま
 うららうららあまうららあま
 うららうららあまうららあま
 うららうららあまうららあま

さうらうら

天保四年乃玉 松齋藤中乃為

紫式部日記款

凡例

此日記ははれほくあつてあま今世に海に流る。若のくにま
 かり。せくれきて是は。侍臣中なれと。此中と侍臣との中にも
 ことより侍臣申れ。ちことおいてきた。侍臣類聚を成と。植松茂
 岳うまての家守中と。これをもあまて。ちたさかをよめて。この注
 釈をその一なるを。はれと。程のうちにや。不と。たれたる。れ
 と。若中をよめ。は。いう。せん。さて。此日記。源氏物語をなす。よ
 くだん人は。注釈に。あたら。うらら。は。て。ま。ち。は。く。の。初。掌
 此人乃たぬに。侍臣。誠者のたれ。その。ゆ。ゆ。ゆ。源氏物語を。この。ゆ

たえらぬぬ人此たぬにとてせん

○注釈にては中にてさへくはしめしむ。今此信經亦款^{ウラ}て此は
正しくさうとしかるにたぬはすして信經亦款^{ウラ}て此はたぬにて
書風ところ。此の款^{ウラ}とてさへくはしめしむ。信^{ウラ}て此風ところをさうてさへくはしめしむ。
彼も此風はさへくはしめしむ。此はたぬにたぬ。又あつたぬのうさへくはしめしむ。
信^{ウラ}中此信を向とてさへくはしめしむ。又あつたぬのうさへくはしめしむ。
又さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
すうらんとたぬとてさへくはしめしむ。

○源氏物語五十四帖は、此もさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
中に引くはさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。

○官をたぬとてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
と、群書類聚中とたぬとてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
此外、信經中にてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
此信經乃とは、信經中の末小段の事をさへくはしめしむ。又注釈のうち、信經中
を、信經、群書類聚中を、款^{ウラ}中、字中の中を、一字とのさへくはしめしむ。

○此此者此系系は、信經中にてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
此、業家七論を向とてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
此安者此今抄ありとてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
物語の法状、此の抄をたぬとてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。
此風中は、注釈此とてさへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。さへくはしめしむ。

ぬとはいふまじい

○装束此といふ一とはつてくつはるぬいふを指して女の装束
なとはは、繪おうり後を見ぬのこいへは、くそをいひにえらるれど
要一きふをいひ、いそひていそひていそひていそひていそひていそひて
を考へて、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
しうを、これすち乃、いそひていそひていそひていそひていそひていそひて
は、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて

○漢の語、傳、なま、く、いそひていそひていそひていそひていそひていそひて
くそ、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
う、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて

○これ、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
た、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
れ、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
た、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて
な、いそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひていそひて

文政十三年九月四日
尾張 清水宣昭

紫式部日記一の巻

秋はまよふは海にありさ海をいん
たゆくをり

これは六十六代一條帝紀寛弘五年紀とありさこの九月後一
條帝うゆれまて流つてよめてさたむへし日本記畧寛弘五年
九月十日戊辰マタ時中宮於左大臣土御門弟御産皇子弟
也親王と名このはう紫花物語百籤抄などこれにたてぬふさな
也秋はまよふは海にありさは七月紀とありははとなくへし
まよふは氣なりまよふはまよふはまよふはまよふはまよふは

かり。されはげえ氣なれとも。まをひと。此は。たふ。氣といふとは。まこ
んま。実明り。まて。へ。ねに。ひ。つ。ま。ね。古。文。を。ら。ら。み。て。さ。と。へ。
さて。公。清。門。庭。は。こ。の。次。の。中。文。
清名彰子。い。か。し。た。ろ。さ。せ。治。ひ。の。清。父。の。道。長。の。ち。上。東。門。院。と。さ。ま。さ。に。
大。匠。は。此。家。の。り。
日本。書。畧。百。鍊。抄。な。と。に。上。東。門。第。と。ま。り。けり。
を。う。は。ね。と。し。ら。き。と。い。の。今
つ。き。は。ん。ふ。し。み。て。忠。を。ま。と。を。い。り。こ。の。こ。と。ま。う。つ。海。の。田。中。道。磨。う。ほ
む。い。う。た。え。歌。う。い。笑。ふ。う。た。え。ま。う。し。な。り。と。い。へ。を。ま。つ。う。う。も。う。人。な
ひ。て。ら。し。と。い。え。れ。た。ま。と。こ。の。ま。は。
ホ。ム。ル。ワ。ラ。フ。
稱。美。と。可。笑。と。ふ。た。い。ふ。さ。な。り。て。う。な
は。い。つ。ま。も。ま。さ。う。し。な。り。と。作。の。い。え。れ。た。る。に。う。り。て。い。海。は。い。つ。く。も。く。を
ら。し。と。う。け。り。な。ほ。石。原。正。明。は。蜻。蛉。日。記。な。る。い。う。に。い。し。れ。を。う。り
ら。海。し。と。い。ふ。奇。に。い。ひ。て。稱。美。の。う。た。も。ま。の。う。た。り。と。い。へ。り。し。

し。つ。ま。へ。ま。う。た。う。に。お。林。菰。基。は。曾。丹。集。な。る。う。た。は。も。と。は。け。え。む
梅。の。を。れ。を。う。き。わ。水。を。ま。う。し。と。ま。う。て。な。む。れ。と。い。ふ。を。い。ひ。ま。て。は
む。ら。と。ま。ら。う。と。ふ。ら。つ。よ。ま。ら。ま。う。め。う。し。と。な。ま。は。い。れ。れ。よ。つ。け。て
ま。ぶ。う。の。海。の。流。は。あ。や。海。う。な。へ。し。

池。乃。と。乃。の。こ。は。え。と。ま。や。ま。水。の。ほ。う。の。ま。む。む。た。の。う。ま。う。い。あ。つ
さ。と。乃。の。お。ほ。う。の。ま。と。え。ん。な。る。に。ゆ。て。ま。や。な。む。て。ふ。だ。ん。の。い。ど。
経
さ。や。う。の。ま。く。あ。え。れ。ま。う。う。う。う。
な。の。う。ら。の。あ。う。ま。海。な。り。お。の。あ。え。地。を。う。り。ま。は。ら。う。う。の。う。の。ま。に
の。ま。も。れ。す。と。ま。い。へ。り。ま。の。お。根。に。い。く。ま。ね。く。に。よ。り。ま。ま。な。り。と。あ
ま。ぶ。う。の。不。断。と。な。げ。の。ま。な。り。ま。ま。秋。の。ま。あ。つ。ま。ま。ま。の。ま。

えんなる中にあはれさやまはく、きんにうたれたる後継の声をきく
うらあはれまはるゝとなく、不断の山溪は、中流、序、姓、身、の、ほ、と、ま、れ
い、山、新、の、た、め、な、く、

やうくす、一、山、風、の、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、の、き、え、せ、ぬ、水、の、お、と、な、ひ、よ、ま、は、る、
ら、う、ま、は、る、は、な、く、

やうく、い、や、の、き、後、よ、う、め、さ、い、う、た、く、を、く、意、は、ま、が、い、く、ニ、な、く、ま、は、る、の、は、
イツモノなり、水の音をたれそ、水のやま、水の音をたれ、一、やうくす、
一、と、い、ふ、か、ん、ふ、く、風、の、き、を、た、の、つ、く、耳、に、ま、り、く、な、う、ぬ、れ、ぬ、水、
も、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、
き、を、い、難、平、と、よ、に、き、を、た、よ、に、ま、り、ま、は、る、と、あ、は、る、は、と

とのえに

に、ま、り、ま、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、と、な、く、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、
い、な、や、ま、う、お、ま、り、ま、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、と、な、く、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、
に、ま、り、ま、は、る、中、流、の、山、溪、ま、は、る、と、な、く、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、
あ、は、る、の、ま、は、る、い、や、の、き、を、た、の、つ、く、耳、に、ま、り、く、な、う、ぬ、れ、ぬ、水、
の、ま、り、ま、は、る、い、や、の、き、を、た、の、つ、く、耳、に、ま、り、く、な、う、ぬ、れ、ぬ、水、
意、な、く、お、ま、り、ま、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、と、な、く、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、
ま、り、ま、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、と、な、く、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、
ま、り、ま、は、る、う、ら、あ、は、れ、ま、は、る、と、な、く、水、の、音、に、ま、り、ま、は、る、と、な、く、

い、あ、り、ま、は、る、の、い、や、の、き、を、た、の、つ、く、耳、に、ま、り、く、な、う、ぬ、れ、ぬ、水、

へをさだつてまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
くよちしむたにむすむあやー

いふことなるまじきはけの申すはあつて海をさる今はつと
ていづく中かまじきたよめよをれと程たがはえあつて
お首をさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
りうたよは憂世の意をうつーんを現はすに我々の處にお
ぼあけなげはほくおひとつたふをりよひきたるにへを
あまのこころをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
いふことなるまじきはけの申すはあつて海をさる今はつと
おひきたるにへをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを

すれをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
ーんをはひきたるにへをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
たうにさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
ーんをはひきたるにへをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
ーんをはひきたるにへをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
ーんをはひきたるにへをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを

まふうきほの月ほーんを本のーんをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
かりたをやか官はいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
ほ東のうきうちねとありーんをさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを
いふことなるまかりしうきはけの申すはあつて海をさる今はつと
さる花人をか花んさるいふことなるまかりしうきとつーんをはひきたるにへを

めて法任ちの宮主ハ馬場庵に庵らしの僧おえ文庵をよにと
いつ言をうさそなをにもつりゆへ帰れり。淨教ハ法衣なり。すうた
すてのまてそあそれり。又ちよにや。はよ。を保れらにそあ
うま。い。え。う。ゆ。え。帰。る。を。申。志。く。一。さ。え。ニ。サ。イ。ラ。ニ。キ。を。り。う。う。そ。一。は。
庵のさなる法庵の橋をう。あそれ。い。と。ん。ふ。う。く。め。て。感。ず。る。も。あ
らわ。い。い。も。う。勢。き。の。戸。を。う。ち。う。さ。と。は。お。の。ち。指。を。え。ん。ゆ。へ。
清
禪 い
さい さあうと。大わ。く。を。う。や。ま。ひ。て。お。一。を。う。め。し。

大威徳ハ右のみ壇のうちの一軒なり。このまへをう。さ。て。こ。の。阿。闍
梨の腰を屈めて礼をな。ら。る。な。り
んこまわ。つ。れ。は。お。と。あ。け。ぬ

いの人にはおに女官はいまはちう。い。と。あ。ら。女。官。と。あ。ら。お。ま。の。女。房
ま。さ。り。の。れ。これの女房ま。の。は。家。へ。ま。わ。ら。に。東。の。あ。け。た。こ。を
あ。よ。う。の。つ。さ。こ。そ。は。い。か。持。の。僧。よ。を。ひ。き。や。な。れ。と。こ。れ。を。あ。は。ら
へ。り。い。と。あ。れ。を。あ。を。と。へ。う。ま。一。し。い。れ。を。ま。う。て。は。い。ひ。を。ま。へ。か。し。と。ま
わ。り。と。は。い。い。ま。一。と。れ。を。な。り

また庵のたそちのつげににんごせは。ほ。の。ち。ち。ま。う。た。あ。一。た。の。あ。も
そ。お。ち。ぬ。小。庵。あ。う。を。ほ。ひ。て。こ。す。お。ど。ん。か。一。て。や。ま。ぬ。も。う。を。せ
ぬ。一
局は。形。な。く。ほ。の。ち。ち。ま。う。た。は。ボ。ウ。ツ。と。な。る。七。月。に。あ。一。た
の。ち。ま。な。り。ま。い。お。ち。ぬ。小。は。東。の。羽。さ。の。う。ま。や。た。ほ。を。な。り。庵

いこの申文の序文を、東三條為家公の子、所名道長世に所傳、
白事にこれぞと云ふは、

そこの言はざるを、いかにいふは、けりなるを、枝を、せ、
凡丁のこころ、は、のきを、
は、ほの、
け、

そ、
公の、
へ、
冷本、

ぬ、
お、
て、
そ、
奇、

を、

この、
う、
ろ、
々、

らるれとなく

あそとほろろとすやちしり

このあそとほろろの声なく。とは疾くもふよほくを疾くよみだこ
とれとのほろろをほろろの微笑^{ホエ}まで。リョウとてさう。まを視
めーいー。まー。まほろろ

あそとほろろとすやちしり

あそとほろろの聲なく。とは疾くもふよほくを疾くよみだこ
とれとのほろろをほろろの微笑^{ホエ}まで。リョウとてさう。まを視
めーいー。まー。まほろろ

のまのまはといひやしくすーと風のうへさにはなといひをいれえ。

月のまのまはといひやしくすーと風のうへさにはなといひをいれえ。

あそとほろろとすやちしり

あめやうなる夕暮に。寧お君とふくお君とてわさるに。とのうち。庭の
三信君。すれのつゆりあけこかほろ

あめやうなる夕暮に。寧お君とふくお君とてわさるに。とのうち。庭の

あめやうなる夕暮に。寧お君とふくお君とてわさるに。とのうち。庭の

あめやうなる夕暮に。寧お君とふくお君とてわさるに。とのうち。庭の

あめやうなる夕暮に。寧お君とふくお君とてわさるに。とのうち。庭の

あめやうなる夕暮に。寧お君とふくお君とてわさるに。とのうち。庭の

衛門三府並右馬寮等大設宴會貢獻酬奉五月六日競馬之
員也オミヤと云々この後三代實録貞觀四年十月四日貞觀六年十
月の條をよみしるは恒例十月にあらざるべし拾女抄に
是なりまゝ日本記畧應和二年八月廿日己巳キタ今日殿上侍
臣設和歌員態奉五月庚申夜男女房献和歌男方員仍
所為也とあり奇のまげをばなり拵まにひく右まげにたり言は
るゝあつて申おまげをば一拵へりまゝ一あつてか酒あきたるひ
まゝことまげをのたまはくあつてつと傍の人の拵はくめて文
なきつらむと云は顔なき女のまげをばなりこのまげにまげま
へて基の員態のまゝをまげまゝへりまゝ拵のまげまげにけり日
くうそめに城屋亭へ海をそまむその中にうらまゝをそまむ

乃基磐のまげをまげまゝと云ふと云ふあつてまげまゝを
まはは海女に机のまげなり殿まの仲なり又湖月抄藝に基のま
げなり基の所まげなりまげまゝをその用ハおまげ盛水へのまげなり
すまゆと申くおまげ我す机おてそ形の浴衣をまゝ一しうあつ
けたりまゝへ今名はまゝと云ふものまげ小拵とのおまげ造つて飾りまゝ
なまこのころの書おまげをまゝたりまげ浴衣つらうたる水のと云
はらうのまげをうらまをたるとすれをら次の拵なり
まのくにまゝの浴衣ひらうと云ふ一拵ははまはまなれ
まゝのまげをまげまゝなりまのまげはまゝにまゝにこのまげ

はうとまじりてらんたらなは。後清あまひい。まじりてらんたま。身をあ
 せをく。い。らん。一。種。少。を。う。と。あ。う。ら。れ。う。た。う。ん。は。て。刀。祢
 と。う。う。は。古。事。記。傳。三。に。妻。う。る。た。う。この。ほ。う。葛。城。集。に。旅。人
 い。う。あ。は。た。ぬ。に。人。あ。ひ。り。う。旅。人。は。す。ま。を。け。こ。も。む。な。一。ま。を。ま。や
 と。い。う。一。種。少。の。と。子。た。ち。と。ま。え。た。う。後。の。考。へ。を。う。う。降。云。く。今。世。に。
 店。を。え。と。う。ま。の。い。店。を。と。扱。と。う。う。と。の。ゆ。き。ひ。か。う。こ。れ。え。め。の。ま。う。
 い。う。ま。に。た。ま。と。う。く。志。れ。ま。古。書。の。と。ま。店。を。え。と。あ。ん。お。は。い。う。
 な。う。と。ま。と。あ。う。え。う。う。へ。こ。れ。お。か。れ。う。て。あ。う。は。大。う。さ。か。り。や。り。の
 た。ま。れ。乃。あ。ま。ひ。い。は。あ。ま。へ。一。と。ま。お。れ。う。い。海。を。一。奇。い。今。種。を。と
 け。い。ん。を。一。ま。い。を。く。い。て。さ。た。う。一。種。の。奇。な。う。そ。奇。は。そ。い。め。う。り。七。五。
 七。五。と。つ。ま。て。平。家。お。れ。と。う。書。う。あ。ま。さ。ん。さ。う。た。う。た。と。く。い。ハ。フ。エ。テ。ト
 な。り。

七五とつまて平家おれとつ書うあまさんさうたうたとくいハフエテト
 なり

齊信卿

字、まを、つ、う、ん、字、お、中、お、種、房、実成卿、み、の、お、お、た、う、海、を、な、と、う、て、

あ、お、ひ、種、少、を、あ、う、

ま、ま、ま、い、中、ま、ま、ま、な、う、左、字、お、中、お、は、左、字、中、お、ま、て、お、ま、お、ま、う、け、ま、
 う、お、い、う、い、え、字、お、に、左、右、は、あ、う、ま、ま、は、お、ま、お、お、中、お、と、う、い、へ、こ、と、ま、う、
 な、う、を、う、く、い、う、い、ま、ま、ま、に、お、人、と、し、右、を、お、監、り、け、た、う、を、あ、ま、う、お、人、の
 種、う、種、せ、繼、に、正、四、位、下、の、お、階、一、た、う、を、四、位、の、正、下、ま、て、の、ほ、う、一、ま、を、と
 い、へ、と、甲、一、く、い、れ、ア、の、こ、ろ、の、を、う、ま、ま、海、な、う、み、の、お、お、い、美、濃、守、に
 て、お、お、を、け、た、う、を、い、ふ、な、ま、へ、一、ま、を、う、て、い、い、こ、の、人、を、ア、イ、テ、に、一、て、道

長谷の越し流しなり。

経房。新平による。信平はと公卿補任作経房。

下皆効之と云々

日侍とのいお扱ひは、度おぼややあらんせはを流えに

日侍との扱ひをよよはったなりあそひとあううとてキト一たの扱ひなり

と一は治らわしたる人のなるたえをいおこしつ。まかいつくしけをい

ささりうてそのころは、志めやうなることなり

いおわい里長をて、扱里長にさうてわることをうんのは、いおこし

係れり。なるたえの里長にありて、中々事仕の縁なり。志めやうなる

よふしは、よふふあやうなる夕暮をいふをいけてこのいそぎをいしやうなる

うとやうとなく。このいそぎをいふに依り。そのころ、信平保水りいふ

新平による

女六のいなきさうのあそませまていんは、いそぎをいふに依り、いおこし

あはらつとひたり

は薫物を相合して、いそぎをつまはなり。合番の方を、河海抄抄に書し。

このいそぎに、薫物合番のいそぎあり。まううは、合番をいふに依り

うふういそぎ道ふ。赤字お、おのうらちをいふ。このいそぎは、いひる新し

まういそぎなり。いそぎをいふ。いそぎのいそぎに、いそぎうちあふ。いそぎをいへに

まういそぎをいひて、いそぎはこれいふ。いそぎは、いそぎひつて

とらうたけえなめり

うへういそぎいよふいそぎなり。下ういそぎなる。扱局をいふなり。いそぎをいふ。いそぎのいそぎ

この事お元の局のつるなり。戸くちい。を局の戸口なり。ひまきい。今いよ
 と同一。こたは。流香そ。たき。またる香をき。うらめ。十月。ふて。
 赤衣のきぬをき。ふ。ふ。は。一。下。ナラス。た。た。げ。カ。ユ。ラ。シ
 ゲ。な。り。か。あ。り。一。得。平。活。け。り。今。観。中。に。よ。り。

後より。おの。姫君の。うち。す。れ。は。と。ち。お。ほ。ひ。を。い。さ。や。り。し。也。の。う。た。り。の
 女。の。う。ち。と。一。後。へ。ふ。ふ。と。よ。に。名。あ。け。て。お。さ。ほ。の。は。ま。や。神。る。ん。を。ん
 なく。ね。と。ろ。う。す。も。の。う。と。し。す。こ。一。お。さ。あ。り。後。へ。う。ほ。の。う。ち。あ。り。み。後
 へ。う。な。と。こ。ほ。う。に。む。う。う。う。を。後。へ。う。み。な。う。も。よ。に。人。の。お。う。に。い
 た。こ。よ。ぬ。く。ま。ほ。く。と。は。か。う。う。う。う。

後より。おの。姫君を。引。つ。け。て。よ。む。へ。一。口。お。ほ。ひ。い。い。ひ。ひ。ひ。
 す。と。し。神。を。と。を。口。に。置。き。ひ。た。る。う。へ。一。べ。ら。ふ。口。置。き。ひ。と。の。よ。の。を。あ。う。う。
 ら。に。お。の。う。う。の。女。は。お。は。か。き。ふ。え。した。女。を。う。お。さ。ほ。の。は。お。ね。う。を。
 ね。と。ろ。う。ほ。ま。め。ら。は。と。の。う。は。の。意。を。う。お。ね。く。は。カ。ク。ベ。ツ。を。う。し。し。し。し。し。
 一。後。な。り。

おの。う。の。後。を。と。の。ほ。ま。め。ら。は。と。の。う。は。の。意。を。う。お。ね。く。は。カ。ク。ベ。ツ。を。う。し。し。し。し。し。
 おの。う。の。後。を。と。の。ほ。ま。め。ら。は。と。の。う。は。の。意。を。う。お。ね。く。は。カ。ク。ベ。ツ。を。う。し。し。し。し。し。
 葉の。ま。と。ゆ。え。う。に。神。ぬ。ま。て。花。乃。あ。り。に。お。代。を。申。つ。む
 と。と。一。も。ん。と。す。る。ほ。ま。め。ら。は。と。の。う。は。の。意。を。う。お。ね。く。は。カ。ク。ベ。ツ。を。う。し。し。し。し。し。
 な。あ。と。と。め。つ

た。え。九。月。九。日。を。う。う。う。の。後。の。葉。に。ま。せ。た。う。結。を。う。ま。く。派。の。い。ま。れ。け。う。葉

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

おまへの中宮は月をうらなはるてさうにさうした

よきふにすむさそをやまけよきをたぐる。それを行カをもて。よは
 とつふにふ駐るつて。其のむもつて。やいさるるを。これつ
 笑も。笑も。笑のみにまらう。是たり。このい書よ。はをり
 といふよ。めと。今。せはまも。て。な。い。と。や。

月ころ。さ。こ。こ。こ。ひ。つ。さ。う。ち。の。さ。う。ま。は。ま。に。こ。い。に。あ。そ。寺
 こ。た。た。つ。て。ま。ん。じ。と。う。ら。う。ひ。の。さ。り。く。ま。わ。つ。と。い。三。上。の。佛。ま
 い。ら。に。き。き。し。や。ん。と。お。い。や。る。わ。ん。や。し。と。せ。に。あ。る。う。ま。う。め
 一あつめて。やはよろのつる神を。み。ま。う。に。て。ぬ。を。あ。し。と。名。く。さ。こ。ゆ
 この月。あ。れ。ひ。つ。僧。ま。の。ほ。ふ。だ。を。た。つ。て。は。し。之。驗。者。は。後。法
 如。持。な。す。て。功。驗。あ。る。さ。し。し。三。上。の。佛。ハ。三。世。諸。佛。を。い。ら。に。ま。は。

いに。い。う。と。ま。し。な。ん。と。い。や。る。こ。後。陽。師。ハ。後。を。と。する。さ。の。な。う。
 八百。あ。い。さ。り。な。れ。意。を。耳。や。う。な。て。ぬ。ま。ハ。延。喜。式。六。月。晦。日。の。入
 禊の。辞。に。高。天。原。耳。振。立。聞。物。止。馬。牽。立。と。ある。初。上。う。へ。
 け。な。う。ま。に。こ。ゆ。ハ。こ。ゆ。と。さ。り。と。な。り。の。こ。ら。を。く。数。命。又。二。命
 に。よ。る。い。ら。に。き。き。儀。中。得。れ。う。こ。ゆ。を。数。命。に。よ。る。
 こ。い。さ。り。の。つ。ふ。ひ。た。ち。さ。り。と。し。さ。る。ま。あ。け。ぬ
 慶の。ち。ち。の。め。ら。に。あ。い。て。は。彌。經。せ。さ。り。を。ほ。ん。と。し。は。後。を。た。て。つ
 う。え。に。な。り。こ。ま。い。十。日。の。取。な。り

い。丁。乃。ひ。ん。う。な。ま。は。は。う。ち。の。女。房。ま。う。つ。と。い。て。は。う。ま。に。一。は。は。い。を
 ま。ま。う。つ。た。る。人。の。い。ひ。や。ふ。い。と。ま。あ。ひ。を。び。い。つ。ほ。け。つ。ほ。け。つ。に。

本丁をたてつゝまんどおのろくはーまわさう

うちの女房は内裏の女房をうらうたうんはすぬそちよき師

いとまのひい一雙をうらう師の一人を一雙ひきつげきたる屏風の内

にまきてそのいつげきたる口に几丁を建たるぬりあつろくえよう師

一とよを一人づ各あつたう師とよ

いづこにえかむとぬい増正僧部くさかうかしてぶざうそんりいさげん

うたらしをよひひびあつろくはへうたのえううそんりいさげん

にたつていーうさう申

かむとぬいは下よりうらヌヨウイナラヌとよいぞはよひいーを

りたのえううそんりいさげんあつろくはへうたのえううそんりいさげん

因一この法勝ともの法名勅の形をそあつろくはへうたのえううそんりいさげん

持よりかきあきりたのえううそんりいさげん

い乃ぬいーとよいさげんあつろくはへうたのえううそんりいさげん

これはかきあき

い曹司は内局をうらうたうんはすぬそちよき師

れてんつうはうーとよいさげんあつろくはへうたのえううそんりいさげん

十余人あつろく

いさうこーあつろくはへうたのえううそんりいさげん

あかろんは中々かこめいれにそのすきさぬの袖ゆつくんうたをさう

ははらへたをとは一のひてなれえと

こゝろさハ身ウゴキキテ。まゝあつた。上氣するは。さうハ。我軍亭より
なり。中々。信實のうら。い。中になら。得り。や。み。居く。なる。如。房の
中。に。か。め。れ。ぬ。なり。申。つ。ん。こ。い。せ。も。死。あ。ま。ま。か。こ。ま。た。な。れ。え。ら
た。に。申。つ。り。あ。ひ。さ。死。之。は。え。ら。れ。ぬ。え。中。ま。の。乳。母。や。乃。人。と。も。な
る。一。れ。と。は。幸。ひ。た。人。を。り。申。つ。ん。野。平。申。つ。ん。と
す。い。ま。あ。り。め。り

十百のあつたに。ぶ。の。さ。う。一。二。五。五。の。さ。て。い。は。し。に。う。つ。せ。は。し。に。に
な。と。え。み。あ。つ。は。い。あ。丁。や。お。う。ま。て。お。う。一。ま。に

い。は。い。庇。の。さ。を。り。う。け。あ。い。い。けん。と。し。ま。に。さ。う。なる。あ。い。え。う。け
を。ほ。せ。ぬ。や。り。い。は。う。う。に。簾。の。さ。う。に。い。ん。丁。や。い。う。つ。と。ま。ま。て。た

キ。は。い。なり

い。は。し。や。う。て。い。ま。う。づ。ほ。い。む。さ。う。づ。を。は。つ。い。て。か。お。ま。か。い。ん。源
う。づ。ま。の。う。う。せ。は。い。一。い。源。書。に。い。一。い。ま。ま。さ。う。死。を。い。て。ま。あ
い。づ。け。ま。さ。う。の。せ。乃。あ。え。れ。か。た。く。た。の。い。け。ぬ。と。う。さ。う。ま。死。え
が。う。て。い。い。僧。正。の。名。なり。上。の。ま。う。づ。は。た。の。僧。部。下。の。ま。う。づ。い。法。務。僧
部。なり。法。務。は。かん。源。と。い。を。名。なり。い。源。書。に。こ。の。い。ち。を。ま。た。た。ひ。う。に
た。う。い。は。す。へ。さ。や。う。後。の。う。せ。は。い。て。佛。小。部。の。書。を。り。源。文。と
い。ひ。て。本。朝。文。粹。に。あ。や。と。い。た。う。う。死。を。て。は。その。源。書。に。お。ん。源
僧。部。の。書。を。ま。う。なり。ま。あ。ま。野。平。に。ま

後。の。う。ち。を。へ。て。佛。部。一。一。こ。え。終。り。野。平。の。た。の。う。く。は。う。と。ま。ま。は。い

此本丁のうちに予に、おきし師とて徳をいひて、まことに二人の
法匠たちをも、此加納のためなふ、此凡丁のうちに入きたるなり。そは
の君、数々の情誼、信とに、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、
なり)

及のよろふ、おきし師とて徳をいひて、まことに二人の
法匠たちをも、此加納のためなふ、此凡丁のうちに入きたるなり。そは
の君、数々の情誼、信とに、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、
なり)

及のよろふ、おきし師とて徳をいひて、まことに二人の
法匠たちをも、此加納のためなふ、此凡丁のうちに入きたるなり。そは
の君、数々の情誼、信とに、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、
なり)

あてんを、おきし師とて徳をいひて、まことに二人の
法匠たちをも、此加納のためなふ、此凡丁のうちに入きたるなり。そは
の君、数々の情誼、信とに、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、
なり)

あてんを、おきし師とて徳をいひて、まことに二人の
法匠たちをも、此加納のためなふ、此凡丁のうちに入きたるなり。そは
の君、数々の情誼、信とに、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、内へ、
なり)

とむねさうとさう

またこのうしろのさばふたてきささちやうのよふ内侍のうしろの中務のめ
のと。暇衣あそび少納言あそびのものと。いとひめさきみのこーさふゆめのこととおーいり
さきさきやうやうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
みーろくんとさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

と、外うしろなり。内侍のうしろ。頼平の侍しんは小妍子こけんと。中なか文の侍しんは小妍子こけんと。中なか文の侍しんは小妍子こけんと。
右宮みぎのみやと。暇衣あそび同どうくは。頼平たのへいの侍しんは小妍子こけんと。中なか文なかぶんにたせ給たまひのち批ひ記き皇太すうたい
にこれなり。暇衣あそび同どうくは。頼平たのへいの侍しんは小妍子こけんと。中なか文なかぶんにたせ給たまひのち批ひ記き皇太すうたい
いとひめ君きみ同どうくは。頼平たのへいの侍しんは小妍子こけんと。中なか文なかぶんにたせ給たまひのち批ひ記き皇太すうたい
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ
にえこれこれを。まゝとてこれこれをいふけり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ

次つぎの中なか文なかぶんをいふ。三さん文ぶんにみよと。いふ。これこれは。頼平たのへいの侍しんは小妍子こけんと。中なか文なかぶんにたせ給たまひのち批ひ記き皇太すうたい
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ

と。いふ。中なか文なかぶんをいふ。三さん文ぶんにみよと。いふ。これこれは。頼平たのへいの侍しんは小妍子こけんと。中なか文なかぶんにたせ給たまひのち批ひ記き皇太すうたい
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ
いと暇衣あそびとは。右末みぎすえの女めをいふ称なづなり。神かみ楽らくにえこれこれを。倫りん子のこいさ

さうさうさうはさうてぬえさううけささううけはさうさう。
あはさうさうハキレタ。キモガツブレタ。といふ意あて。あはさうさうのえをえたり。
さうさうだひさうにさうハ。平身あさうさうのちねとハ胞衣さう。俗
に後身とぬい。薄いとさうハ。味なく。特あひの詞さう。さうはさうのけさうさうよ
ずを。特になさうさうてぬえさうさういさひとさうと。傍てぬえさうさうい。尻をよ
さうさうさうさう。とさうにさあさうさうのけさう。今ひとさうさうさうと。尻を
よさうてぬえさうさうさうといさうさうさう。ぬえ。額さう。額さう。地を突さう。礼拜
するはさうさう。 数中。さうさうのさうさう。 尻さう

頼定

赤面の人ハ。女房さうさう。このさうこれに。後上人のわたさう方に。さうさうさう
さう。あさうこれにさうさうさう。ト。ウエウエテウツトリ。とさうさうさう。さうさうさう
すさうてのちさうさう

さうさうさうのた申さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
りけるさうさうさう。後おとさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
とさうさうさうさうさう

さうさうハ。化粧さうさう。化粧さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうハ。化粧さうさう。化粧さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
て。化粧さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

とをりつゆを

幸ね君のうぼろを〜 縁はをなとせむいとつ〜 たゆり〜 ち
ていふなりけんしとそのまはふえ〜 人乃ふあうちのうたえふおほえ
は〜 なる〜 ころ〜

幸ね君のうぼろを〜 中ねとね〜 ちををいふとち〜 になをふは
ま〜 になをいふとねを〜 といふゆうえとは〜 ころ〜 のとを〜 この
中ね幸ね君をたふ〜 師て我身はいつ〜 久はをえ〜 ち〜
う〜 つんといふを〜 そのまは〜 といふ〜 といふ〜 といふ〜
ひのちを〜 したるをたがひ〜 ころ〜 ころ〜 ころ〜 はイチダンノチキ
ミテアリ〜 といふを〜 難事〜 なるを〜 ね〜 なる〜

い中とせはを縁よはと〜 縁の縁〜 なるを〜 なるを〜 なるを〜

よ

い中とせはを縁よはと〜 縁の縁〜 なるを〜 なるを〜 なるを〜
なりむくつけ〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜

源

げん〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜
〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜
つけたまは〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜
くおはりせめ〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜

源花人〜 縁花人〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜
なり〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜 なる〜

なりつ 尻とさうはしてこのあさうあまのつとをさうけり
新中一平が
れかたりとほ

うゆめとれぶそをせしめてあはは一そしたるそちたひくにおく
はるれ一はのたひをなきにせしにはれたるゆ一けりよろこび
うはなのみをうん

十百の午の時なり。かきぬしてさうくおひをけきたるはをたひくあお
そ一掃したれえ。あかぬちたをくさうたさのあまぬして朝日此
は一そしたるそちすとぬさなり。信よヨガアケタヤウナとぬさなり。
増養子のせに。後醍醐帝の皇子にせしむるにひつ一のたなり
ほとふすてにこをぬさのぬせりと公相大納言。皇子誕生をやとぬと

あこやうにのゆよをさく人のそち。車のおけたらや一そとぬへは
さゆきしをよこにさへこれゆ六十八代の帝にて御諦敦成。長秋五年
二月位につく
てはひ長元五年四月のさしをゆき
こを後一條帝とす一まはゆうそまてゆはちるそなり
ぬのあをれく一けこのほとあはまうに。おぼれつ女房をこぬま
ちあがれつやすむほまかうちひたる人。ゆきをさうふ一しんく
一にさうそふ

朝務ハおぼれつといふたの文のあやなり。おぼれつはウロクシ
タルなり。たちあられハ退かたり。うさうふ一ハはをほをいふつ
まぐ一さは。ニアハシキなり。おぼれ 信平 信長。今敷中はよ。
度まう人もあさこにさうせゆうて。月ころ。まげほうとまへにはうん。

またいふはふれぬ(きせのけい)なるうらほも、
ほろり強き事と人よりまはるうけ、
はのちのつう、
なぬ

まのとはよまゝの度の方から、
りひころまははるのよにつひ、
つよれたるを、
ことごとくまをひ、

兼隆卿 源 俊賢卿
右宰相中納言は、
いそぐもてまわぬ、
ほとのほろり、

奏
るこいせさせ、

中宮権亮實能朝臣為御劔使、
同書源礼記に、
文をともたり、
は奉幣使たり、
十一のち、
伊勢太神宮、
臣奏聞宣命、

儀式九月十日奉伊勢太神宮幣儀に即日使等從神祇官發
 向廿日使等就内侍復命をあるを乞ふ。貞觀儀式に廿日
 復命とあれば歸はまはしく存のりなり。式部のおとどひたる
 けらにやまの師はつひと云ふものなるにたしむる三まをこの日
 此の儀に
 下す人乃れせざるをへしと云ふなり。まこの神事によきて
 禊堂の禊
 禊をさるるて。後つこと罷りて。まかきし序使のあらきり。又
 してけら
 らいさるとありて。まかきし序使のあらきり。延喜神祇式
 甲處有穢し入其處謂着座乙及同處人皆為穢乙下亦同こ
 拾友抄に公賢問曰。明成宿禰答曰。穢物見在之時。入未之
 仁可為甲。但不及着座飲食。聞穢由即退出者不可為穢乎。
 何をてきたりてまへり

此は穢物をはとのうへにかけし。穢之位。つる子。此のものと
 かつこころふふらたとして。大さきおんのかかとつらつら
 祀母の倫子の。此は穢なきつらつら。うはあはれあてま
 なにも祀母なる人の。うは穢なきつらつら。うはあはれあてま
 此の儀にやまの師はつひと云ふものなるにたしむる三まをこの日
 此の儀に
 下す人乃れせざるをへしと云ふなり。まこの神事によきて
 禊堂の禊
 禊をさるるて。後つこと罷りて。まかきし序使のあらきり。又
 してけら
 らいさるとありて。まかきし序使のあらきり。延喜神祇式
 甲處有穢し入其處謂着座乙及同處人皆為穢乙下亦同こ
 拾友抄に公賢問曰。明成宿禰答曰。穢物見在之時。入未之
 仁可為甲。但不及着座飲食。聞穢由即退出者不可為穢乎。
 何をてきたりてまへり

これは今入の乳母なり

御湯殿は皇子の御湯ありて、火をきりて、まのしぐらみよりのきぬのふく
あふきたうじきりて、御湯まわす

御湯殿は皇子に御湯ありて、まのしぐらみよりのきぬのふく
あふきたうじきりて、御湯まわす

夜つあ儀式なり。御産部類に、西の御湯殿なり。たうじ
きとは、衣服令の義解によれ、位階おあれ、服色をきりて、まのしぐら
あふきたうじきりて、御湯まわす

御産部類源礼に、廿九日、云々始御湯殿、云々貞

仲、并自餘廳官、各着當色。以白袍、着例衣、云々同書。源礼に、史生属

代佐伯貞仲、云々六人、皆着束帯、白重、上着當色。白生、云々同書。敦

に廳官等、着當色、運御湯殿物具、以白絹袍、着例袍之上、なとある

をよれ、白絹の袍なり

御湯殿をけり、たのむをよれ、白絹の袍なり。をよりのり、こちう、云々

まのしぐらみよりのきぬのふく、あふきたうじきりて、御湯まわす

婦、まのしぐらみよりのきぬのふく、あふきたうじきりて、御湯まわす

十六、小あゆれをよ

ちう、まのしぐらみよりのきぬのふく、あふきたうじきりて、御湯まわす

に、まのしぐらみよりのきぬのふく、あふきたうじきりて、御湯まわす

さたに、まのしぐらみよりのきぬのふく、あふきたうじきりて、御湯まわす

御産部類源礼に、其南北、瓦臺二脚、居、瓦十六口、なとある

秘抄に九禁中着湯卷上臈一人典侍一人也。是候御湯殿故也。な
とそたり

まは度しきまう結ひていそりこ少お表とりのうらまのなれど
アていそにやわ

まの表まなりとりのうらま造つた虎の尻をへし。虎はまはめてたけ
くこそま黙なれば千をひなるとためをへし。御産部類源礼に皇子令

渡御浴殿給々御匣殿持屏角虎頭屏角と虎頭とハニ種なりなりとそたり

うさぬいさみのつれをへし。まはふらまをせめてにほろみりすうめにうたれ
りこいはうほまのうさまをぬひさう

す川のまの松の葉をへし。海船はまを短橋小大船小まや貝をとを

りたる文なりとあり。前後をへしとあるとりのなり。大海のすうめまといは織り

たる海船をまをせめてすうたう備え見せたるをいふ。こいは裳の腰にて

羅に度量糸を纏たなり。こいはまのなれしの子をなり

少お表は林の葉村とふとふなをま白銀なり。てはうりまやう

たり。ねまのはうさうありと人のふまへにやうなけまハこいそりなり。
まにたうなめり

少お表のふしを脱せう。又青まをいへる。織物は後ようまを

まの扱めてま信ふありまは。結されけりなり。されえうけありてと

り。人のふまとは。限りある物をれえ。我らの海おはしとされえなり。

昨きとふとふとふと。中書のを文ふ。これれとるをたうを蝶とまを

かゝるといふ人かよれとまへにそありに蝶は使われとももの下くも
あつてとあふかまをたうの蝶をてたうとひひをたうとせのまひひの
にけり文をてこれは中若乃信候なるを信もくふつはア一こは小
かひもあつてのひさうたうて裳のこりに秋の暮村のあやしをうあたらに
とひく蝶を向まうてつうてはけさのひなをいひとつう一さ
まふなればまふたうづりほをいひつうといふれたりまふかおまには
裳のまふのまをいひたうづりなるをいひはひ腕するや

屋のまんならふたとこよ源少雅通をとうちまををたけび一まこれ
たうらうちをうまんとあうまひはくへんちドのまうづごんにはま
ひはふらあまめあまあまへけまはあまをたけつてまに人まうづ

ふたところ類書の傍注に頼通教通とにうちまのまにあにまたり
陽師のまはまをひひてまをませせまをまたりごんは清陽を
此方の禮身なりうらまはまのまをまをまはけて散糸をませ
まはなり

文をむるを^{博士}病人女ひるなりがらんのをまにたうて史記のくまをむ
病人あてまをうけたんなり史記の二卷は五帝本紀黃帝乃不を
ま一御産部類記に卅日乙亥ま藏人弁讀史記五帝本紀進
自本例一二尺許黃帝者少典之子姓公孫名曰軒轅生而神靈
弱而能言幼而徇齊長而敦敏成而聰明治五氣藝五種撫万
民諸侯咸尊軒轅為天子^{三編之}讀之

一、此を序湯屋の儀式なり

つらうに人ふ位十人六位十人ふたなみふたをたれり

つらうに鳴弦して弓をひきて弦をたれとをり。これと序湯屋の儀式なり。ふたなみ二部なり。はては鳴弦のしうくよたけくひくしうきふりくあつらひ。帝。吾の序湯屋に由あるとをり。林正秘抄に。早旦供御湯。之々藏人為鳴弦候戶外。之々次典侍取河藥器拋板于時。藏人鳴弦。是毎日每度事也。と云たり。こはちなまにひつて

よはうの御湯とよとをり。湯をくくさうしてはかる。こはたを。いふこのはうせいりやうそりせん。伊智さうもむとにのはうせとをり。まゐの孝經をへ

こはくくひに。朝の御湯屋のよのそめは脱言にや。又は。あつりのとれ。得るを。あつや。さうい。重々なり。朝夕あるとをり。孝經を。天子章をへ。御産部類。敦に。予所讀書。天子章。愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢慢於人。德教加於百姓。刑于四海。盖天子之孝也。甫刑云。一人有慶。兆民賴之。之々讀書了。退出三遍と云たり

又たうらひは。史記の文帝に。これをもよむをへ

史記の文帝の事をよむと。序湯屋に。これをもよむをよの儀に。太史公。天子章をよむ。この外。礼記の中府篇。

ちるくに織ぬとやせむきさう。うらゝくそ。ダダテ名ニクキツトニタル
といふ意なり。これはちるく。おせぬ。たふん。おせぬ。つて。え。よ。に。と。し
申す。おせぬ。と。ま。し。た。ま。ひ。た。い。さ。し。ふ。た。く。海。し。よ。は。せ。て。た。え
ず。ぬ。と。ぬ。の。う。ら。ま。に。う。ま。れ。た。う。ま。の。む。さ。の。の。い。さ。ぬ。す。く。よ。に
一。つ。は。ち。お。は。あ。や。う。す。ま。の。む。一。た。ん。を。あ。う

を。結。ぶ。た。い。う。海。う。一。さ。し。ん。を。さ。に。い。さ。と。結。ぶ。お。ぬ。を。た。ま。ひ。た
ハ。強。う。に。き。く。く。月。に。た。つ。は。う。の。お。せ。ぬ。を。せ。た。た。お。ぬ。く。え
ず。ぬ。と。ぬ。の。結。ぶ。お。ま。の。結。ぶ。を。さ。し。た。ま。ひ。た。い。は。笑。止。す。キ
ノ。ト。ク。と。い。う。意。なり。う。ま。ぬ。え。た。う。の。よ。に。申。す。お。ぬ。と。い。ひ。て。織。ぬ。と
い。ふ。は。た。う。や。り。な。れ。と。着。衣。か。と。い。は。れ。表。意。に。着。は。制。外。な。る。へ

一。む。さ。ん。ハ。平。絹。を。う。す。よ。は。ぬ。ま。り。う。ら。に。キ。ニ。と。い。ふ。意。ケ。コ。リ
か。る。意。なり。う。ま。ぬ。い。し。と。い。は。ち。を。ぬ。い。う。た。つ。ぬ。一

あ。ら。ま。を。み。め。に。え。た。ら。く。く。う。や。う。ま。て。す。一。な。う。ぬ。さ。海。に。一。た。う。ん
ま。あ。ら。申。文。う。ち。う。さ。か。と。一。て。い。ひ。あ。ま。せ。た。う。な。る。と。い。ふ。と。い。ひ。一。り
と。よ。ま。い。の。ほ。と。た。か。一。ま。ら。の。は。を。う。一。と。え。ら。ま。一。た。う。ん。の。の。お。ぬ。い
た。ら。ぬ。意。なり。一。さ。え。あ。う。そ。に。あ。え。け。

麻。の。海。も。あ。の。意。の。海。と。同。一。ん。ま。を。う。ぬ。ぬ。い。さ。あ。な。う。ん。ま。あ。ら。は。キ
モ。子。ノ。アル。か。う。申。文。は。結。文。を。う。一。よ。ま。ひ。え。幸。齡。を。う。た。か。一。ま。ら
ハ。幸。本。ま。に。こ。れ。は。二。の。ま。ら。の。ん。や。す。ま。さ。た。な。る。一。と。あ。ら。二。の。ま。ら。ハ。次
乃。方。を。う。高。本。ま。に。こ。れ。ま。ら。を。よ。ら。一。と。い。と。あ。ら。上。の。ま。ら。ハ。上。の

つる同上人右邊のゆきはねまへのとちん沈懸盤のうけし盤あろくこのゆきかたをいへ
くはえり

かに七のりのは湯屋のよをゆへうへくたをてそはひなりまうり
三の和よりぬきゆき育のよをうけいせうまつはそ中みぬの雀人
あて中ま大夫よりつよくましゆき育つうゆつるまうまうまう
をひとはませれまを流ひて三束み束七束九束とあるとなりま
れふそたるまうりゆき育あをまうてゆき育なまをあることこ
おまのハ中まの和まにまうまのあてまをら沈懸盤以下これなり
それぞ中まあまよりまうりまうり 傳平まうりこのとに今敷中又
つかにま

後賢解 行成傳
源中継ら後宰相はゆき育にむつし衣まのまうり折立いれ惟ひ子は包み
覆たはひ下たつるまをたかへまのたかへまをさなれまをまゆ人のま
くまうりまうりたりあふこのまたかへい大このまをまうりまうり
後賢は傳平の奥に中官権大夫と名たり行成は同書に皇太后宮
権大夫とありま中まのつはなるま又宰相なるまをいれま
まにこれに実成宰相おまうりまへ一実成は寛弘四年中官権
亮と大系系に名たれまをり程成まを得りたあありまをまに
まぬりゆき育のまを傳平の政書に名たりゆこの二人よりま
まうりたかへまのまとはこの人このまをまうりまをまうりま
まうりまをまうりまをまうりまをまうりまをまうりまをまうり

色ふしにしろくはなりとて。とて。数平に。一本とて。いふ。考へに
主殿とのきうたち。まゝに。まゝに。いふ。おこたうに。ひまの。すなは。に。う。う。こ。の
い。う。う。本。の。こ。と。こ。に。う。ち。む。れ。て。を。う。上。ま。ま。の。中。の。め。い。ん。な。と。や。う。の。ま。れ
とも。は。お。の。う。ち。う。た。ら。く。へ。か。め。る。と。い。う。は。世。中。の。光。り。の。ひ。て。た。え。一。箇。一
た。る。と。を。う。げ。ふ。つ。一。と。お。と。い。ひ。い。ふ。お。よ。し。の。ほ。ふ。て。れ。る。ま。ろ。に。う。ち。え
こ。こ。ち。よ。け。な。る。や

主殿は。度。中。の。二。を。と。り。ま。ま。な。入。官。人。也。と。と。火。の。う。ち。等。の。と。を
と。司。職。な。れ。は。火。を。ひ。て。た。と。職。に。つ。て。ひ。る。の。や。う。な。う。と。い。へ。う。他
う。う。の。と。ま。わ。る。は。度。中。へ。係。れ。り。世。中。の。光。り。の。室。子。清。誕。生。の。と。な。り。り
げ。に。え。う。ち。く。に。な。り。り。一。ま。い。室。子。な。ま。の。ま。れ。ま。を。ほ。へ。り。な。と。や。う

に。度。中。と。ま。れ。ま。と。う。ち。く。に。お。ひ。を。り。一。も。今。う。く。室。子。ま。れ。ま。を。ほ。へ
ひ。て。は。一。う。お。ひ。一。と。ま。の。ま。い。形。小。少。な。こ。こ。ち。よ。け。あ。り。と。な。り。り。ま
ろ。は。伊。智。お。徳。ふ。す。ろ。な。め。を。え。る。と。と。お。よ。に。と。あ。る。を。派。の。新。秋。小。は。を。る
ほ。一。と。め。を。え。る。と。と。お。よ。に。と。あ。る。を。派。の。新。秋。小。は。を。る
ほ。く。た。ま。ま。ん。と。ま。い。ま。を。ほ。へ。り。と。ま。れ。に。と。な。り。り。と。な。り。り。と。な。り。り
れ。た。に。よ。う。は。お。う。に。を。ぬ。れ。ま。ま。と。ま。の。め。れ。は。を。お。よ。し。と。ま。れ。一。と。ま。れ。一
お。ひ。一。と。ま。の。お。よ。し。教。に。ま。の。ま。ま。と。ま。の。ま。ま。と。ま。の。ま。ま。と。ま。の。ま。ま。と
は。ら。か。う。に。術。か。る。へ。一

して。度。の。う。ち。れ。ん。は。か。た。え。う。の。う。ち。に。一。と。あ。る。ぬ。み。ほ。と。ま。な。と。と。そ
こ。は。う。と。ぬ。く。こ。一。と。う。ち。う。ち。あ。り。て。り。ち。う。ひ。お。き。う。け。な。れ。ま。ま。一。と。と。た

にあひははたり

申して内裏の官人小巻してこれ屋の敷人をいへる。こゝとまゝ屋内
に上りまのいゝとてさういふ申れらうさほなり。ゆゑあひ顔てあは
陸多と申へんまゝなり

にまのまゝなりとて女房八人ひらりるるにははらぎて。まあげあらしめと
申しひて。まらさいん盤まらさほなり。こよひのいほりまは。室内のい
まらさい。くあさやうなる申ひまえしたる。まのほらば。
つまよともまらほらさほい。あふさにまらたさうめなど。
いとはまらにほらさま

にまのいほりまら申して中まのおまにまらさう。まあげ決まらまらて。陸

膳の女房は。たふ髪上すほなり。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
か。いほりまら。いほりまら。膳の女房に中。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
いは。モツタイラ。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
海抄に。下場とあり。髪の下りのまらさほなり。あふさにまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
いは。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
ある。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
につられた。格ふた。いほりまら。考へた。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。

らみあけた。女房ハ源式源式。たふ髪上すほなり。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
大輔。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。
いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。いほりまら。

ふはくせう平のまゝにたらしなをうささる人のうたりにては—むさひつ
つおたりた—ふとえらひてゆり—まふをとおのほろとてふ
あつとをさす候をうらわすとて—まへ—人をえさて経へ—を
ん—と—と—水へおたすと申—さほてえたり—
—をうらふ春の後式のはか—まきまうらうはうらぬ—を
えうて信膳の役を勤めさせ給ふ—と—い—この信膳の役は
えうまけて髪上—なをえさる—と—い—い—この信膳の役は
—て—ん—と—と—と—まきまうらうはうらぬ—と—なり
は丁のひん—おとて二浦うらに—まよ—人おなみた—のまをい
おえおな—い—ごのれまの—^米女—と—い—わ—る—産—ま—の—た—ふ—は—申—と

新へきてこれいひ—と—は—て—又—の—む—に—た—て—向—こ—と—つ—^雙
に—よ—わ—る—げ—を—う—ら—

えお—え—に—え—ら—ひ—あ—を—い—へ—威—儀—序—膳—い—ふ—春—に—あ—る—と—な—り—序—身—部
影—不—妻—し—さ—の—役—に—東—女—ま—の—ま—わ—る—な—り—た—て—と—い—は—屏—風—又—は—信—膳
の—序—身—を—さ—へ—し—と—わ—る—す—ま—う—ら—威—儀—序—膳—を—な—り—^{い—き—装—甲—に—す—}
あ—ふ—ら—う—清—に—月—の—ら—ほ—を—た—に—う—ち—め—ま—ひ—と—<sup>殿—司—
_{に—}</sup>と—い—あ—け—と—ま—の—ま—^{に—}
ん—^司—の—女—官—の—ほ—と—あ—ぬ—ま—り—

と—く—ま—け—う—ら—ら—女—官—の—あ—な—ら—^一—台—記—の—別—記—小—又—安
六年正月十九日祿法女官祿内侍所去々理髮六人<sup>各六丈
縮二尺</sup>
去々とら—た—る—れ—ち—ま—^一—本—に—い—ま—^一—あ—け—と—^{を—う—ら—は—_別}

にてかありのつぎうなるかと冷本をいさひさう

關司

まうとつうおをとまのゆれおやあしんおろろにはけりざさけさうしつ梵

替

とろのえんはし替たなはくし替さきふし替てん替のびんし替れきたよ

れやらちていさきなくれ替こまてかたれいんおえとほくうよえに

ねろろにえまの女房たちのい替くはうささけは替し替なるにうへてこ

し替さきふし替をふへ替さ替く替お屋おく替し替さきふし替は替女官とさ替れ替髪あけて

ねろろのえん替し替た替さ替ふ替の替儀式たち替た替く替し替さ替ふ替を替ぬ替を替し替女房替

は河海抄にま室の番本替と替つり替 情平いん替の廊替と替は替今替義替平

一平替を替さ替に替よ替

おとのまかりとてく女房替に替ほ替の替に替ひ替で替た替たり替ほ替う替け替に替ま替く替と替る替こ替た

流中にきおほし替さ替ふ替れ替お替の替の替裳替う替さ替ぬ替を替し替ほ替ふ替の替こ替松替う替さ替ふ替

いた替さ替ふ替の替と替を替う替し替お替屋替し替さ替ふ替い替さ替の替く替う替と替れ替ぬ替と替う替せん替し替よ替

陸奥守妻

大式替の替名替宣替告替の替官替名替お替て替これ替殿替の替内替に替ま替は替の替女替房替なり

た替い替よ替れ替命替輝替い替く替さ替ぬ替い替て替ま替れ替に替ま替を替ま替ろ替う替の替て替ぬ替し替て替い替と替あ替は

銀泥

や替に替に替ほ替う替に替す替う替た替つ替お替け替ち替え替ん替を替ぬ替ま替の替う替さ替ぬ替や替に替ま替れ

ま替ま替ふ替れ替ほ替を替お替す替さ替う替布替さ替と替は替せ替し替て替あ替る替を替ぬ替う替け替ち替え替ん替を替ぬ替い

ま替は替や替う替な替は替な替く替の替や替ほ替し替い替え替ふ替く替う替さ替ぬ替な替く

女替内替の替り替と替ふ替ま替ろ替う替の替す替え替ぬ替を替な替さ替な替く替し替は替ほ替め替つ替し替ぬ替い替ま替ろ替ま

松替う替え替の替よ替ま替ひ替を替あ替く替ま替せ替た替る替ん替を替う替と替く替し替

ま替ろ替う替の替こ替れ替ま替銀替泥替な替ま替く替し替は替溪替と替を替銀替泥替し替て替す替て替松替う替枝替を替ぬ

いものにしなまろへし。おれはあゝそをなとふり。よまゝい。泥の香つと。
糸のねとにやうておつなう。うとくし。はり。ハナと。し。まゝふて。し。はまのつ
たなう。ぬちふてう。

おれのねとよ。よろふはおとうなう。あろまのまをひとくつさ。うろふ
おれのねとよ。よろふはおとうなう。あろまのまをひとくつさ。うろふ
そくハ筋をうへ。つ。う。ろふ。は。つ。キ。ア。フ。にて。さ。う。の。ね。と。う。た。を。お。房。と
ま。れ。つ。さ。う。い。あ。ふ。し。な。う。さ。う。人。の。昔。人。を。年。老。な。を。し。よ。こ。う。と。
この屋の内に。ま。は。の。女。房。な。う。

ろのねの四あう。あう。う。の。い。と。人。ふ。え。せ。お。ほ。し。く。い。え。よ。お。の。ろ。う。れ。ま。う。ふ。
い。い。す。ふ。お。れ。あ。げ。て。この。せ。に。え。う。う。め。て。た。さ。と。ま。た。え。い。ん。れ。う。と。い。ひ。
或。句

信う。う。は。あ。な。う。う。と。く。と。お。せ。ん。を。は。な。ま。て。工。を。た。う。す。う。て。よ。よ。ろ。
こ。ひ。信。う。

おれのね。おれを。銀。信。に。よ。か。の。信。ハ。二。回。に。能。す。な。う。お。お。信。の。と。な。う。
と。あり。て。の。せ。に。は。ほ。お。の。お。せ。極。楽。な。の。あ。て。た。さ。い。と。お。お。の。の。
お。れ。は。た。う。お。て。た。ら。う。い。愛。痛。事。に。て。愛。へ。さ。い。の。す。く。れ。た。を。い。ふ。
ろ。は。お。お。の。う。ろ。ま。ま。う。お。房。を。お。れ。は。う。ま。ま。い。は。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
ふ。あ。を。う。この。あ。な。も。秋。さ。の。声。を。う。う。こ。は。オ。ウ。カ。オ。イ。モ。ウ。タ。イ。オ。イ。と。い。
ふ。お。お。の。お。お。ん。ま。お。お。の。お。お。の。お。お。の。お。お。の。お。お。の。お。お。の。お。お。の。お。お。の。
ま。の。た。く。ひ。な。さ。を。え。て。ま。を。す。う。て。ま。あ。こ。へ。う。と。な。う。

うん。た。ち。め。お。を。た。ら。し。い。う。の。う。へ。に。ま。わ。り。て。う。ら。ま。な。を。う。ろ。ろ。ま。う。て。お。お。う。

えー

傍中に大を中をよひり公注をばなにとにすれ後一隊すあゆ
たの書にきてそのまよりと名たきしはうくにきんてんをん
くひーたきり。おをばははまにきてまよふいんがうよだあー
はッレハッレニテカイテ。ゆつこの表にこーいん声つうひにすくはえ
いのーとなく。そればサヤキなく。あをきつてはかろをまになく
数平にとりてよとくけり。てしーてにをばさういけていさう
又の東月をねそくころはへをーねふさうそ人は。舟にみりてあま
ふもこををうよとねそく酒にけりまねたふうこのぼとま
ひくこ申

又の東月をねそくの東にて。そは九月十六りなり。ころハ。時長なり。同。は
まは。まの白装束ををい。はうに。髪をぼとまはやりにそゆ。ま
小たま源式部。高木。信隆。あせらの女。衣を。小玉。湯。小志。もん。う。海。や。す。い。い
せん。か。と。そ。ち。く。わ。た。を。を。ん。掌。ね。中。の。度。の。中。お。表。い。さ。を。ひ。つ。て。後。に。
右。掌。ね。中。ね。を。た。ら。に。さ。を。は。せ。て。舟。に。の。せ。後。よ。う。た。は。ま。う。と。は。り
て。さ。は。ふ。う。や。海。ー。や。ゆ。ん。と。み。いた。ー。わ。か。たり

源経房卿

教通

ふは。こ。池。の。あ。ま。う。す。う。は。コ。ラ。リ。ト。ヌ。ケ。テ。と。い。ふ。ま。い。は。は。い。
ミカミナカラナク。と。み。や。ー。の。と。い。外。あ。て。外。の。あ。を。え。い。ー。た。う。又。と。け。う。
を。と。の。い。う。う。い。れ。は。ゆ。れ。て。の。と。ー。た。た。や。う。な。に。鈴。本。箱。八。街。ハ。林。
張。を。と。め。う。と。い。ま。い。う。う。 教通。新。平。の。信。原。小。教。通。と。は

いと白き夜に月ひうらみはたすたはらとせうしきやうなる

白き夜に白砂をまきさたるをうたへしきよ白装束に似てたはら

さ女房とは夜にたてるをうらみさうするさうの怪しきやへ

陣

かのちんにもゆあきさゆしつはうへ人よきうけさ三徳をえし

にて侍候命婦若う命婦うまの命婦たを命婦の乳母命婦まは

婦なとまびんゆりしくもくえあくぬ人をなればひうともゆらん

ふきの人こそよみひひぬ度までかきひておはに上りぬま一死おを

てまや一たふれゆらう物ともあましくにゆら

うへはつ子は度上人をうまうへ内裏の女中をひいて若三徳と

りこれをも女房をともはなすきう入るところにやきう入るところにや初夜にえてふ内裏の女房と

なり後小つたるとしははえきぬ人をうへた今この所方に

ゆかりたによて赤の人を内へうたをうまひえアワテなりぬま

一死おをえや一いぬま一死おおろのぬま一死の侍にゆえや

とら意をうまきこの女房まいふ赤雲のためをとりあはさるる

せいの赤いたはゆやけのゆらやうなひ花人女道雅をいほひあてま

うほくさきたふとや柳かみ管にいきてまぬれやうそよ一は上勸院

死宛ともあ申ししそかれまきまのあまよ又けはよ一は上勸院

よとは上へしこよひのま一死は上にははうておとろく一は上

おほやけの内裏なりおの救うらるるま月録なりやそはフルナリ

スガニとらををう勸學院傍中の証書にえたりこの院の宛とま

とうなぞ申はしめ及もぬとされおとしもなきう。さむ。ふりたけいん
たく省きて書もれきう。されい。さむ。ふりたけいん。さむ。ふりたけいん
らぬとをう)

れほつたの事一よは。らのおれいど。えんたらのふくは。と。けのうらう。さ
う。おく。さ。の。い。を。を。と。さ。て。い。う。は。度。上。人。既。た。り。を。う。り。て。う。う。と。お。
ほ。や。け。れ。ろ。く。は。お。ほ。う。ら。い。ふ。う。ほ。こ。し。は。と。さ。い。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。

おほさこのふいこよのいさを青のちさこのこととをう。うい先口はて。お東の
儀式に用とをう。既え。花。人。既。を。へ。お。ほ。や。け。の。縁。の。内。裏。す。う。縁。の
縁。を。う。こ。し。は。い。の。お。ほ。う。ら。い。ふ。う。ほ。こ。し。は。と。さ。い。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。

て。法。を。う。て。や。を。腰。に。さ。は。し。の。を。い。え。を。へ。お。ほ。や。け。ろ。く。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。
らぬ。定。ゆ。り。た。い。お。ほ。や。け。の。と。ほ。う。を。う。へ。と。を。う。お。ほ。や。け。ろ。く。の。縁。の。内。裏。す。う。縁。の

注小頼定道方よに

い。ち。つ。け。つ。ろ。う。ほ。つ。ろ。う。橋。三。位。の。わ。ら。う。お。ほ。や。け。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。
に。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。と。ほ。う。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。と。を。う。お。ほ。や。け。ろ。く。の。縁。の。内。裏。す。う。縁。の
た。ら。ぬ。と。を。う。て。や。を。腰。に。さ。は。し。の。を。い。え。を。へ。お。ほ。や。け。ろ。く。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。

細長ハ河海抜に。幼少のまゝのさす。おほやけろく。と。ゆ。う。さ。ら。ぬ。と。を。う。て。や。を。腰。に。さ。は。し。の。を。い。え。を。へ。
お。ほ。や。け。ろ。く。の。お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。と。を。う。お。ほ。や。け。ろ。く。の。縁。の。内。裏。す。う。縁。の
お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。と。を。う。お。ほ。や。け。ろ。く。の。縁。の。内。裏。す。う。縁。の

お。ほ。や。け。ろ。く。を。い。へ。と。を。う。お。ほ。や。け。ろ。く。の。縁。の。内。裏。す。う。縁。の

たせ河海抄の文は九束にうつすをそに八つとすまた御
産部類源礼にと五日庚辰々早且撤御座並御几帳御屏風等
供尋常御装束公卿座屏風等同被立替とある六月あに
て皇子降候より廿八のときより三日にすれば河海抄の儀は
候うあらくねまをれとも九にせ八にせうつひをうくのま向に
たひていそりたひめはつるきへ

頼通卿

九日の束はままたちまつる候う候ふもさう一ひとまひのきり
すゑなりぎ一三いとふ下にいよわう一はまの儀教をさぬぶさうち
てほくらふかとまふのときいほめう一うこほらにをうたをとうま
ちてはまひつるにまにさめしめさうけ

いあめう一古代ナラス茶やうをさううちてといふせにちか一といひ
てそいれうらに厚おたをいよと仰う候にや後あをそのふたに
あ一てにうちてたはともそなりあぬへ一ほくらひあき葉山をり
そめをたを違うてゆほあふさるをいふうころけれといひ
あはあをたあゆはるとなれとこれをはうをいひあう一うこほらに
う一とをゆほれとさうをさうてはこれをもくくさうといひつるに
よあめしきふぶとこころけれとさうをさうてほめてゆめなよめ
をころ一とははるさうといふん

朽木形

こよひにためてまひのふ丁まひのたあて人はこらうちまのまうこ
たりめつう一くにうなあてまふすたれうういぬまにひへ

こたして見ると、たゞをさへ人のすゝまをばうにさへんをあらはれけりせうのちか
とゆふ人のそぢとけりし事なり

折石形の木丁ハ白木丁と建つれなきは、はれまゝのまゝとてうぢつ
しさいと申すその白装束をこよひをこにうたふれなきは、人にくは
カクユカニキなく、おほめでは、色マイテなく、うたふなきは、衣衣より透
とほりて、表にきつる法をすもれ、つやくと申すをうたひしは、
こころうしこほりて、あまのわをたふさふとて、人の姿のまやう
に、又申すこよひれきくそくして、たうの手あなう、まぢとけりしこのおま
とのねとて、さいと申すこころう、たふさふのまをこつたは、なれたのねと
も、さうだし、さいと申すこころう、たふさふのまをこつたは、なれたのねと
くちん

おぼしき・おぼしき・おぼしき

十月十日のち、おぼしきと申す、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、
らふ、夜の中にも、あつたに、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、
うぢせ、に乳母のうぢせうぢせ、うぢせ、うぢせ、うぢせ、うぢせ、うぢせ、うぢせ、うぢせ、
ろくも、おぼしき、おぼしき、おぼしき

さう、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、
にいした、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、
味、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、
おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、
ふもと、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、おぼしき、

とてなう、あなれば、
いふ丁のうららに、
このまゝ、
なすけ、
は、
お、
う、
う、
う、

いぬとは大なと
まのほし

も、
これ、
お、

具平親王

お、
お、

具平親王、

な、
お、
お、
お、
お、

一いつい又さし法よきそのまのなまの終よのをんは一又法一は、
の記こ一や一といとた一けさきとなくと一とほり又させ終ひてと
えて次に教通公これいひこになく終よ一とてそこは寛弘六年のこと
なるをこの法とすや中務家のげとそとせ終つや道長公のうれ一と
おけて、或初にささきを法よなくんをあつ人とほこの式部のいこの伊
祐の子の頼成といふは、眞平親王の御子をなれをかく、傳中、紫
女系傳の本にささきに出るひかたといふと、ささきとて、ささきとて、
一、又大後小、松屋のうへに、いささか、眞平親王の御子の、
に、ささき、とて、いささか、と、傳房公、兼保四年、うせ終ひて、
と大系系に、ささき、は、
寛弘六年 女系傳に、はて、代た、ささき、とて、いささか、とて、

かぢ。 [和訓栞] 佛家より在加持の音也 瑜祇經に三密加持速疾顯と見ゆ

かぢ。 [和訓栞] 佛家より在加持の音也

瑜祇經に三密加持速疾顯と見ゆ三密
と身口意也加持は空海の經に徃來
所入為加攝而不散為持と見えり

そり。 晴蛉日記のつひの物の名
を御とて愛感の御とて朝
弄の御とていふもあらず
人らもかゝるもあらず
直言する手はあらず
雅俗存を辨ぬ故に系
集集りて年加老久と續記空
知なり於年加老と書紀立見宴
歌なり於年加老とありては愛
感の御とて又七事記に
許志とありて此者嘲嘆也と
仰天而嘆とあり書紀在場と

みより。 もの外古く表如老と表
古とありは皆嘲弄のそり
愛感と嘲弄とはさうさう
さうあれいそいそあらん
後世よりさうは雅言に愛感
の御とていふもあらず
そり。 俗言嘲弄のそり
あれとて愛感の御とて
雅俗存を辨ぬ故に系
集集りて年加老と書紀立見宴
歌なり於年加老とありては愛
感の御とて又七事記に
許志とありて此者嘲嘆也と
仰天而嘆とあり書紀在場と

俗方相

